岡部 さつき（教科教育専攻）

本当に優れている教師

１．教育を考える一言

「本当に優れている教師は 1 から 10 までのすべてを教えない。1 から 5 までは教えるが、そこから先は生徒自身に自発的に学習させるものだ」－某公立高校校長

２．背景

教師は、限られた授業時間内に、より多くの内容を教えることが求められます。受験指導に熱心な進学校では、特にこの傾向が強いです。世間一般からしても、このような教師こそが優秀であるとしばしばみなされます。とりわけ昨今の経済不況の影響もあり、進学塾に通わずして志望校合格を目指す生徒が増えています。その結果として、高校での受験指導の充実化がますます期待されていることも否定しがたい事実です。

しかし、本当に優れている教師とは短時間で多くの受験知識を習得させる者を指すのでしょうか。冒頭で取り上げた某公立高校校長によれば、本当に優れている教師とは教科書内容を教えきることに固執しないといいます。そして、それは生徒の「真の学力」を引き出すための最も重要なカギとなるのです。

３．考察

数年前まで高校生であった自身の経験からしても、受験に必要な知識やスキルを教えてくれる先生に対して正直好意的な感情を持ってしまうものです。他方、そういった教員から授かった知識は、受験を終えると同時に不思議なくらい簡単に忘れてしまうものです。その恐るべき忘却は、いわば「受動的な学習姿勢」によって知識を得たことに起因するといえます。

確かに短時間で能率的に学習事項を身につけることは魅力的です。しかしそれは同時に、「学習事項の仮習得」にしかすぎず、生徒に自身がそうした錯覚に陥っていることさえ気づかせません。本来は、「知りたい」、「学びたい」という内から湧き上がる学習意欲を満たすことが大切であり、そのプロセスを経てはじめて「真の学力」が得られるのです。こうして得た知識こそ、生徒の血となり肉となるのです。

畢竟、「1 から 10 まですべてを教える教師」は一見して優れているようにみえますが、生徒自身の学習意欲を抑制してしまう危険性を内在しているのです。一方で「あえてすべてを教えずに、6 以上を生徒自身に自発的に学習させる教師」の方が、「真の学力」を習得するためには極めて効果的な特性を有しており、優秀といえるのでしょう。

冒頭の言葉を聞くまで前者こそが理想の教師像であると絶対的に肯定していた筆者にとって、それは自身の教育観を大きく変える一言となりました。